

マダガスカル語の他動性に関して

箕浦 信勝

1. はじめに

本稿は、東京外国語大学語学研究所所員の幹事の間で、風間伸次郎が中心となって纏めた調査票(高垣 2013)に基づいて書く。調査は、マダガスカル語母語話者の豊田ライブさん(M^{me} Raivo Toyoda, 以下調査協力者)に協力をお願いして、2014年2月に、東京都内で行なわれた。

マダガスカル語の動詞には、伝統的な文法記述においては、3つのボイスがあるとされている。即ち、能動態(active voice, 仏 *voix active*)、受動態(passive voice, 仏 *voix passive*)、関係態(relative voice, 仏 *voix relative*) (Raolison Rajemisa 1971, Andro Vaovao sy Trano Printy Loterana 1973, Keenan 1976¹, Fugier 1999²)である。Adelaar (2011)によると、歴史的には、元の能動態はマダガスカル語の能動態へ、(オーストロネシア語族のうち、台湾の諸言語、フィリピン諸言語に現在でも見られる)元の非能動態は全て、マダガスカル語の受動態へと移行・合流し、マダガスカル語の関係態は、適用(applicative)形式を持つバントゥー諸語との接触の結果、新たに発生したとのことである。また、これらの3つのボイスは、近年のフィリピン諸語等の研究に刺戟されて、動作主態³(仏 *agentif/voix agentive* [→英 actor voice]) 被動者態(仏 *objectif/voix objective* [→英 patient voice])、状況態(仏 *circonstanciel/voix circonstancielle* [→英 circumstantial voice])とするものもある(Rajaona 2006)。本稿ではこれを採用する。

Foley (1985 [2007])はタガログ語に関して、タガログ語の動作主態と被動者態はどちらか一方が無標で他方が有標であるような *asymmetrical* のものではなく、*symmetrical* なものであると主張している。即ち、動作主態から被動者態が一方的にかつ二次的に派生するのではなく、また逆に被動者態から動作主態が二次的に派生するのでもなく、2つのボイスは対等に並立している。この主張は、マダガスカル語にも基本的には当てはまると、本稿の筆者は考える。この考えの萌芽は、箕浦(2004)で、動作主態(=能動態)は順向(*direct*)、

¹ Keenan (1976)は、*relative voice* (関係態)の代わりに、*circumstantial voice* (状況態)という名称を採用している。また、受動態の中に、*intermediary voice* (中間態)を立てている。

² Fugier (1999)は、*voix relatif*の代わりに *voix circonstancielle* (状況態)という名称を採用している。

³ Rajaona (2006)は、*voix agentive* (動作主態)の中に、*m-i*-接頭辞を持つ *voix stative* (中動態)を立てている。また Rajaona (*ibid.*)は、*voix objective* (被動者態)の中に、*-ana* 接尾辞を持つ *voix applicative* (適用態)を立てているが、本稿ではそれを採用しない。一般的に Rajaona (*ibid.*)は、接辞の付き方で、細かな態が区別できるような論調を採っているが、本稿ではそれを採用しない。

主格・対格構文であり、被動者態(=受動態)は反転(inverse)、能格・絶対格構文であり、動作主態は被動者態の逆受動であり、逆に被動者態は動作主態の受動であるという相互的な関係を指摘したところにも見られる。

今回調査協力者に協力をお願いして行なった調査では、状況態はさておいて、できるだけ動作主態と被動者態の文が両方採れるように心がけた。動作主態文と被動者態文の間を自由に行き来できる場合が殆どであるが、中には様々な理由で片方しか採れなかった場合もあった。

次節から、文例を挙げながら、論考を加えていく。

2. マダガスカル語文の吟味

2.1. 直接影響・変化

角田(1991 [2009]: 101)の「1A 直接影響・変化」から見ていく。

- | | | | | |
|-----|------------------------------|---------|---------|------------|
| (1) | a. n-am-ono | lalitra | izy | (動作主態) |
| | AV.PST-VM ⁴ -殺す蠅 | 彼(女) | | |
| | 「彼(女)は蠅を殺した」 | | | |
| | b. no-vono-i=ny | ilay | lalitra | (被動者態) |
| | PST-殺す-PV=3sGEN ⁵ | かの | 蠅 | |
| | 「その蠅は彼(女)が(意図的に)殺した」 | | | |
| | c. voa-vono=ny | ilay | lalitra | (voa 被動者態) |
| | VOA-殺す=3sGEN | かの | 蠅 | |
| | 「その蠅は彼(女)が(気づかずに)殺してしまった」 | | | |

動作主態文の動作主、被動者態文の被動者は、それぞれの文型で「主語」的な属性を持っているようである。「主語」的な属性を悉皆的に挙げることをここではしないが、ここで見て取ることができるのは、当該の名詞句が「定」であるということである。(1a)では、

⁴ 結合価標識(VM)は、同じ動詞語根に *an-*、*i-*の両方を選択できる場合、*an-*を持つ動詞は他動詞に、*i-*を持つ動詞は中動態的な動詞になることがある(cf. Rajaona 2006)が、*an-*を持つ全ての動詞が他動詞であったり、*i-*を持つ全ての動詞が自動詞であったりするというような単純な状況ではない。つまり、結合価標識と言っても、結合価あるいはボイスを決定するものではなく、対比されたときには、結合価およびボイスの決定のニュアンスが出てくる程度のものである。尚、この結合価標識は、動作主態動詞、状況態動詞には例外を除き必須であるが、被動者態動詞には、一部を除き現われない。

⁵ 3人称単数代名詞属格形は、名詞の所有者を表わすだけでなく、被動者態動詞、状況態動詞の動作主も表わす。後者は能格的な働きと言える。

代名詞であり、(1b)では、定冠詞に準ずる *ilay* (かの) が使われている。無標の定冠詞は *ny* であるが、調査協力者は、*ny* の代わりに、*ny* よりも前方照応的 (anaphoric) な力の強い *ilay* を使うことがよくある。

voa-は動詞の被動者態形を形成する接頭辞であるが、被動者態形を形成する他の接辞に比べるとかなり有標性の高いものであり、意味的に無理がある動詞語根とは共起しないと思われる。上の文例では、通常の被動者態形成接尾辞 *-i* で形成された(1b)との対比が見てとれる。通常の被動者態(1b)には「意図的に殺した」というニュアンスがあり、*voa*-を使った被動者態(1c)には「うっかり殺してしまった」というニュアンスがある。前者は、[+control, +volitional]なのに対し、後者は[-control, -volitional]である。一般に先行文献(Andro Vaovao sy Trano Printy Loterana 1973, Fugier 1999, Rajaona 2006)では、*voa*-の「完了性・結果性」が強調されているが、この辺りは、更に吟味が必要である。動作主態では、[+control, +volitional]と[-control, -volitional]の対立は現われないようであるが、少なくとも「殺す」に関しては[+control, +volitional]の読みが default であると思われる。

ともあれ、他動性の高い、即ち動作が被動者に大きな変化をもたらす「殺す」に関しては、動作主態、被動者態、*voa* 被動者態の三者が得られた。

- | | | | | |
|-----|---------------------------|-------|-------|------------|
| (2) | a. n-an-imba | boaty | izy | (動作主態) |
| | AV.PST-VM-壊す | 箱 | 彼(女) | |
| | 「彼(女)は箱を壊した」 | | | |
| | b. no-somba-i=ny | ilay | boaty | (被動者態) |
| | PST-壊す-PV=3sGEN | かの | 箱 | |
| | 「その箱は彼(女)が(意図的に)壊した」 | | | |
| | c. voa-simba=ny | ilay | boaty | (voa 被動者態) |
| | VOA-壊す=3sGEN | かの | 箱 | |
| | 「その箱は彼(女)が(気づかずに)壊してしまった」 | | | |

他動性の高い、即ち動作が被動者に大きな変化をもたらす「壊す」(2a, b, c)の場合も、得られたデータの性質は殆ど、「殺す」(1a, b, c)の場合と変わらない。動作主態、被動者態、*voa* 被動者態の三者が得られたのも同様である。

- | | | | | |
|-----|--------------------------|--------|------|--------|
| (3) | a. n-am-àna ⁶ | lasopy | izy | (動作主態) |
| | AV.PST-VM-温める | スープ | 彼(女) | |

⁶ 当初、調査協力者は、*n-an-afàna* と言っていたが、すぐに、*n-am-àna* と言い直した。両方の形があるのか、前者は誤用であるのかはわからない。

「彼(女)はスープを温めた」

b. n-afana-i=ny ilay lasopy (被動者態)

PST-温める-PV-3sGEN かの スープ

「そのスープは彼(女)が温めた」

他動性の高い、即ち動作が被動者に大きな変化をもたらす「温める」(3a, b)の場合も、得られたデータの性質は殆ど、「殺す」(1a, b), 「壊す」(2a, b)の場合と変わらない。しかし、動作主態, 被動者態の両方は, (1, 2)と同様に得られたが, voa 被動者態は得られなかった。

(4) a. no-vono-i=ny ilay lalitra fa

PST-殺す-PV=3sGEN かの 蠅 が

tsy maty (被動者態+ 1 項動詞節)

NEG 死ぬ

「その蠅は彼(女)が殺(そうと)したが(それは)死ななかった」

b. no-vono-i-ny ilay lalitra fa

PST-殺す-PV-3sGEN かの 蠅 が

tsy mati=ny (被動者態+被動者態)

NEG 殺す(PV)=3sGEN

「その蠅は彼(女)が殺(そうと)したが彼(女)はそれを殺せなかった」

高垣(2013: 3)の調査項目「彼はその蠅を殺したが、死ななかった」が、言語に依っては言えて、他の言語では言えないとしたが、マダガスカル語では言えるようである(4a)。また、「死ななかった(tsy maty)」に属格(=能格)動作主を加えて「彼(女)はそれを殺せなかった(tsy mati-ny)」とまで言うことができる。maty (4a)と mati (4b)は、正書法上、「語末の i は y で書く」という正書法規則のために異なっているが同じものである。1 項動詞 maty は、実際動作主態標識にも見える接頭辞 *m-*を含んでいるが、動作主を属格の *-ny* (彼[女]が) で足して 2 項動詞とし、死ぬモノと殺されるモノが (前節と同一指示的であって、後節では削除されて) 主語位置に留まっている様子は、被動者態動詞の振る舞いを伺わせる。また、調査協力者によると、「彼(女)はその蠅を殺したが、(蠅は)死ななかった」を動作主態 *namono* (cf. 1a) で言うことはできないとのことである。前後 2 つの節で, *lalitra* (蠅) を共通の主語として扱える被動者態の方が都合がいいということであろう。また、動作主態過去 *namono* は、「殺すこと」の完了までも含意しているということであろう。また、voa 被動者態の形 *voavonony* も、「殺すこと」の完了までも含意していると思われる。つまり、被動者態 *novonoiny* は [+control, +volitional, -telic] で、他方 voa 被動者態の形 *voavonony* は [-control, -volitional, +telic] である。動作主態「内」では対立こそ無いが、動作主態 *namono* は [+control,

+volitional, +telic]の読みが default であると思われる。

2.2. 直接影響・無変化

角田(1991 [2009]: 101)の「1B 直接影響・無変化」から見ていく。

- (5)
- | | | | |
|------------------------------|---------|---------|------------|
| a. n-an-daka | baolina | izy | (動作主態) |
| AV.PST-VM-蹴る | ボール | 彼(女) | |
| 「彼(女)はボールを蹴った」 | | | |
| b. no-daka-a=ny ⁷ | ilay | baolina | (被動者態) |
| PST-蹴る-PV-3sGEN | かの | ボール | |
| 「そのボールは彼(女)が蹴った」 | | | |
| c. voa-daka=ny | ilay | baolina | (voa 被動者態) |
| VOA-蹴る=3sGEN | かの | ボール | |
| 「そのボールは彼(女)が(うっかり)蹴ってしまった」 | | | |

マダガスカル語では、他動詞によって表わされる直接影響・無変化(5a, b)も、2.1節の直接影響・変化の場合と振る舞いを異にしない。動作主態(5a)と被動者態(5b), voa 被動者態(5c)の三者が得られた。

- (6)
- | | | | | |
|------------------------------|------|----------|------|--------|
| a. n-an-daka | ny | tongo=ny | izy | (動作主態) |
| AV.PST-VM-蹴る | DEF | 足-3sGEN | 彼(女) | |
| 「彼(女)は彼(女)の足を蹴った」 | | | | |
| b. no-daka-a=ny ⁸ | ilay | tongo=ny | | (被動者態) |
| PST-蹴る-PV-3sGEN | かの | 足-3sGEN | | |
| 「彼(女)の足は彼(女)が蹴った」 | | | | |

「足を蹴る」では、動作主態(6a)と被動者態(6b)の二者が得られた。

- (7)
- | | | | |
|----------------|-------|------|--------|
| a. n-an-dona | olona | izy | (動作主態) |
| AV.PST-VM-ぶつかる | 人 | 彼(女) | |
| 「彼(女)は人にぶつかった」 | | | |

⁷ 正書法では、*nodakàny* と書かれ、形態分析通りに **nodakaany* とは書かれない。アクセント・グループはストレスアクセントが置かれることを示している。

⁸ 正書法では、*nodakàny* と書かれ、形態分析通りに **nodakaany* とは書かれない。アクセント・グループはストレスアクセントが置かれることを示している。

- b. no-dona-i=ny ilay olona (被動者態)
 PST-ぶつかる-PV-3sGEN かの 人
 「その人には彼(女)が(わざと)ぶつかった」
- c. voa-dona=ny ilay olona (voa 被動者態)
 VOA-ぶつかる-3sGEN かの 人
 「その人には彼(女)が(うっかり)ぶつかった」

「人にぶつかる」でも、動作主態(7a), 被動者態(7b), voa 被動者態(7c)の三者が得られた。

2.3. 知覚

角田(1991 [2009]: 101)の「2 知覚」から見ていく。

- (8) a. m-a-hita olona maromaro erỳ aho
 AV.PRES-VM-見える(PV) 人 いくらか あそこに 私
 「私にはあそこに人が数人見える」 (動作主態)
- b. hita=ko ireo olona maromaro erỳ ireo⁹
 見える(PV)=1sGEN それら 人 いくらか あそこに それら
 「あそのこれらの数人の人々は私に見える」 ([語根]被動者態¹⁰)

知覚「人が見える」に関しては、動作主態(8a)と被動者態(8b)の両方が得られた。

- (9) a. m-i-jery ilay vehivavy tsara bika izy (動作主態)
 AV.PRES-VM-見る かの 女 良い 姿 彼(女)
 「彼(女)はそのスタイルのいい女を見ている」
- b. jere-e=ny¹¹ ilay vehivavy tsara bika (被動者態)
 見る-PV=3sGEN かの 女 良い 姿
 「そのスタイルのいい女は彼(女)が見ている」

(8)の[-control, -volitional]な「人が見える」と、(9)の[+control, +volitional]な「女を見る」の両方のデータが得られたが、両方とも動作主態(8a, 9a), 被動者態(8b, 9b)が得られ、[±control, ±volitional]でどちらかの「態」、どちらかの「格関係」が好まれるということは、マダガ

⁹ *ireo* のような指示代名詞が名詞句とともに用いられるときには、名詞句の前後を囲むように指示代名詞が2つ配置される。

¹⁰ 語根被動者態に関しては、例(10)の後の本文を参照されたい。

¹¹ 正書法では、*jerèny* と書かれ、形態分析通りに **jereeny* とは書かれない。アクセント・グラフはストレスアクセントが置かれることを示している。

スカル語には無いようである。寧ろ，[±control, ±volitional]の差は，語彙的な違い(8, 9)で示される。

- (10) a. n-a-hita ilay trano izy (動作主態)
 AV.PST-VM-見える かの 家 彼(女)
 「彼(女)にはその家が見えた」
- b. hita=ny ny/ilay trano ([語根]被動者態)
 見える(PV)=3sGEN DEF/かの 家
 「その家は彼(女)に見えた」

「(無情物が) 見える」(10)も，「(有情物が) 見える」(8)と振る舞いを異にしない。動作主態(10a)と被動者態(10b)の両方が得られる。ただし，(8a)では現在形が用いられ，(10a)では過去形が自然と出てきたのは，被動者の有界性(boundedness)および定性(definiteness)の違いによると思われる。つまり，(8a)の *olona maromaro* (数人の人) は[-bounded, -definite]で，(11a)の *ilay trano* は[+bounded, +definite]という違いがある。また，派生を伴わない語根のみの被動者態の形 *hita* (見る／見た) は，過去・現在という対立が無く，無標のままどちらの時制的意味にも用いられる。このような形式を語根被動者態と呼ぶ。語根被動者態の動詞では，過去と現在が対立せず，無標で表わされる(cf. 森山 2003)。例(8, 10)を参照されたい。

- (11) n-aha-re/n-an-dre¹² olona n-i-antso-antso aho
 AV.PST-VM-聞こえる 人 AV.PST-VM-叫ぶ(RED) 私
 「私には人が叫んだのが聞こえた」 (動作主態)

「聞こえた」に関しては，能動態(11)のみが得られた。パラダイムの得られそうな被動者態の形**no-renes-a-ko* (PST-聞こえる-PV-1sGEN) は調査協力者によってリジェクトされた。また Andro Vaovao sy Trano Printy Loterana (1973)も，被動者態の形**renesa(na)*を載せていない。

- (12) n-aha-re/n-an-dre feo/tabataba izy (動作主態)
 AV.PST-VM-聞こえる 音/雑音 彼(女)
 「彼(女)には音/雑音が聞こえた」

(12)の「(無情物が) 聞こえた」も，(11)の「(有生物の声が) 聞こえた」と同様，能動態

¹² *n-aha-re* と *n-an-dre* は，結合価標識(VM)が異なるが，グロスは同様になる。どちらも使われるようである。

(12)のみが得られ、パラダイムの的に得られそうな被動者態の形*norenesako は(11)の時と同様に調査協力者によってリジェクトされた。

- (13) a. m-i-haino ny hira=n=i Poopy izy
 AV.PRES-VM-聴く DEF 歌=LNK=DEF プーピ 彼(女)
 「彼(女)はプーピの歌を聴く」 (動作主態)
- b. heno-i=ny ny hira=n=i Poopy
 聴く -PV=3sGEN DEF 歌=LNK=DEF プーピ
 「プーピの歌は彼(女)が聴く」 (被動者態)

視覚的知覚「見える」(8, 10)／「見る」(9)の場合とは違って、聴覚的知覚の場合、[-control, -volitional]な「聞こえる」は動作主態(11, 12)のみが得られたのに対し、[+control, +volitional]な「聴く」は動作主態(13a), 被動者態(13b)の両方が得られた。[±control, ±volitional]で態の選択および格関係の選択が異なっている。

- (14) a. n-a-hita ilay fanalahidy/lakile very izy
 AV.PST-VM-見える かの 鍵/鍵 無くす(PV) 彼(女)
 「彼(女)はその無くした鍵を見つけた」 (動作主態)
- b. hita=ny ilay fanalahidy/lakile very
 見える(PV)=3sGEN かの 鍵/鍵 無くす(PV)
 「その無くした鍵は彼(女)が見つけた」 (語根被動者態)

「見つけた」(14)は「見た」(10)と同じ動詞のペア *nahita/hita* を用いており、動作主態、語根被動者態の両方が用いられることも、格関係も同じである。(14b)で過去あるいは完了的なテンスあるいはアスペクトが含意されていても、テンス・アスペクトに関する無標形が用いられているのも(10b)と同じである。

- (15) a. n-an-amboatra seza izy (動作主態)
 AV.PST-VM-作る 椅子 彼(女)
 「彼(女)は椅子を作った」
- b. n-amboar-i=ny ilay seza (被動者態)
 PST-作る -PV=3sGEN かの 椅子
 「その椅子は彼(女)が作った」

「生産」に関わる「作る」(15)では、動作主態(15a)と被動者態(15b)の両方が得られた。

2.4. 追求

角田(1991 [2009]: 101)の「3 追求」から見ていく.

- (16) a. m-i-andry bisy izy (動作主態)
 AV.PRES-VM-待つ バス 彼(女)
 「彼(女)はバスを待っている」
- b. andras-a=ny ilay bisy (被動者態)
 待つ-PV=3sGEN かの バス
 「そのバスは彼が待っている」

追求「待つ」に関しては、動作主態(16a)、被動者態(16b)の両方が得られた.

- (17) a. n-i-andri-andry azy ho tonga/avy aho
 AV.PST-VM-待つ(REL) 3sACC FUT 来る/来る 私
 「私は来る彼(女)を待っていた」 (動作主態)
- b. n-andras-a=ko ho tonga/avy izy
 PST-待つ-PV=1sGEN FUT 来る/来る 彼(女)
 「彼(女)が来るのを私が待っていた」 (被動者態)

無情物の被動者(16)同様、有情物の被動者(17)でも動作主態(17a)、被動者態(17b)の両方が得られた. (17a)では、直訳すれば *azy ho tonga/avy* 「来る彼(女)を」となっており、(17b)では、直訳すれば *ho tonga/avy izy* 「彼(女)が来るのを」と、3人称代名詞と動詞の位置が逆になっていることに注意されたい.

- (18) a. m-i-tady pôketra kely izy (動作主態)
 AV.PRES-VM-探す ポケット 小さい 彼(女)
 「彼(女)は財布を探している」
- b. no-tadiav-i=ny ilay pôketra kely (被動者態)
 PST-探す-PV=3sGEN かの ポケット 小さい
 「その財布は彼(女)が探していた」

無情物の被動者「財布」でも、動作主態(18a)と被動者態(18b)の両方が得られた. ただし、日本語「探している」に対して、調査協力者は、(18b)で過去形を返してきた. この被動者態動詞の現在形 *tadiaviny*(?)を使うことに関して何か好ましくない理由があったのかどうかは、判然としないが気を留めておく必要はあろう.

2.5. 知識

角田(1991 [2009]: 101)の「4 知識」から見ていく.

- (19) a. m-aha-fantatra tsara zavatra maromaro izy
 AV.PRES-VM-知っている 良い こと 様々な 彼(女)
 「彼(女)は様々なことを良く知っている」 (動作主態)
- b. m-aha-fantatra tsara ankamaroan+javatra izy
 AV.PRES-VM-知っている 良い 殆どの+こと 彼(女)
 「彼(女)は殆どのことを良く知っている」 (動作主態)
- c. fanta=ny tsara ny zavatra maromaro
 知っている(PV)=3sGEN 良い DEF こと 様々な
 「様々なことは彼(女)が良く知っている」 (語根被動者態)
- d. fanta=ny tsara ny ankoroan+javatra
 知っている(PV)=3sGEN 良い DEF 殆どの+こと
 「殆どのことは彼(女)が良く知っている」 (語根被動者態)

知識「知っている」に関しても、動作主態(19a, b)、(語根)被動者態(19c, d)の両方が得られた。

- (20) a. m-aha-fantatra tsara azy aho (動作主態)
 AV.PRES-VM-知っている 良い 3sACC 私
 「私は彼(女)のことを良く知っている」
- b. fantatr=o tsara izy (語根被動者態)
 知っている(PV)=1sGEN 良い 彼(女)
 「彼(女)のことは私が良く知っている」

被動者が有情物の場合も、動作主態(20a)、(語根)被動者態(20b)の両方が得られた。

- (21) a. m-a-hay teny frantsay izy (動作主態)
 AV.PRES-VM-できる 語 フランス 彼(女)
 「彼(女)はフランス語ができる」
- b. hai=ny ny teny frantsay (語根被動者態)
 できる(PV)-3sGEN DEF 語 フランス
 「フランス語は彼(女)ができる」

「～語がわかる／できる」は、「知っている」とは違う動詞 *mahay/hay* が用いられる。

- (22) a. m-aha-tadidy ny teni=ko omaly ve ianao?
 AV.PRES-VM-覚えている DEF 言葉=1sGEN 昨日 PQ あなた
 「あなたは私の昨日の言葉を覚えていますか？」 (動作主態)
- b. m-aha-tadidy ny voa-laza=ko omaly ve
 AV.PRES-VM-覚えている DEF VOA-言う=1sGEN 昨日 PQ
 ianao? (動作主態)
 あなた
 「あなたは私が昨日(なんとなく)言ったことを覚えていますか？」
- c. m-aha-tadidy ny no-laza-i=ko omaly
 AV.PRES-VM-覚えている DEF PST-言う-PV=1sGEN 昨日
 ve ianao? (動作主態)
 PQ あなた
 「あなたは私が昨日(意識して)言ったことを覚えていますか？」
- d. tadidi=nao ve ny teni=ko omaly?
 覚えている(PV)=2sGEN PQ DEF 言葉=1sGEN 昨日
 「私の昨日の言葉はあなたは覚えていますか？」 (語根被動者態)
- e. tadidi=nao ve ny voa-laza=ko
 覚えている(PV)=2sGEN PQ DEF VOA-言う=1sGEN
 omaly? (語根被動者態)
 昨日
 「私が昨日(なんとなく)言ったことはあなたは覚えていますか？」
- f. tadidi=nao ve ny no-laza-i=ko
 覚えている(PV)=2sGEN PQ DEF PST-言う-PV=1sGEN
 omaly? (語根被動者態)
 昨日
 「私が昨日(意識して)言ったことはあなたは覚えていますか？」

「言葉を／言ったことを覚えている」に関しては、動作主態(22a, b, c), 語根被動者態(22d, e, f)が得られた。

- (23) a. n-an-adino ny nimerao telefôni=ny/tari+bi=ny
 AV.PST-VM-忘れる DEF 番号 電話=3sGEN/ワイヤー+鉄=3sGEN
 aho (動作主態)
 私
 「私は彼(女)の電話番号を忘れてしまった」

b. hadino=ko ny nimerao telefôni=ny/tari+bi=ny
 忘れる(PV)=1sGEN DEF 番号 電話=3sGEN/ワイヤー+鉄=3sGEN
 「彼(女)の電話番号は私は忘れてしまった」 (語根被動者態)

「忘れた」に関しては、動作主態(23a)、語根被動者態(23b)が得られた。

動作主態の例(19a, b, 20a, 21a, 22a, b, c)は現在形、もう1つの動作主態の例(23a)は過去形である。それらに対応する語根被動者態の形(19c, d, 20b, 21b, 22d, e, f; 23b)は、過去・現在の対立無く無標で表わされる。同様の現象は、視覚的知覚「見える *mahita/hita* (8), 見えた *nahita/hita* (10)」でも見られた。第1節で、動作主態と被動者態はどちらかが無標で他方が有標ということは無いと書いたが、例外的に「知識」と「視覚的知覚」に関しては、語根被動者態が無標で、動作主態は、それから派生された有標形式であるということができる。

2.6. 感情

角田(1991 [2009]: 101)の「5 感情」から見ていく。

- (24) a. n-i-tia mafy ny zana=ny ilay reny
 AV.PST-VM-愛する 強い DEF 子供=3sGEN かの 母
 「その母親は子供を深く愛していた」 (動作主態)
- b. no-tiav-i=n+ilay reny mafy ny zana=ny
 PST-愛する-PV=LNK+かの 母 強い DEF 子供=3sGEN
 「自分の子供を母は深く愛していた」 (被動者態)

感情「愛する」には、動作主態(24a)と被動者態(24b)の両方が得られた。

- (25) a. tia akondro mafy aho (語根動作主態)
 愛する(AV) バナナ 強い 私
 「私はバナナがとても好きだ」
- b. tia=ko mafy ny akondro (語根被動者態)
 愛する(PV)=1sGEN 強い DEF バナナ
 「バナナは私はとても好きだ」

(25a)のように、動作主態の形が、時制・態標識も結合価標識も伴わずに現われることは非常に稀であり、「愛する」に関しては、元々は、被動者態の形式しか無かったところに、動作主態のギャップを埋める圧力がどこからか掛かって、*tia* という形式が産まれたのかもしれない。また、今回得られなかったが、時制・態標識と結合価標識を伴った *mitia* という形もあるようである。

- (26) a. *tsy tia iny olona iny*¹³ *aho* (語根動作主態)
 NEG 愛する(AV) あの 人 あの 私
 「私はあの人が嫌いだ」
- b. *tsy tia=ko iny olona iny* (語根被動者態)
 NEG 愛する(PV)=1sGEN あの 人 あの
 「あの人は私は嫌いだ」

(26a)でも、(25a)と同様に、動作主態の形が、時制・態標識も結合価標識も伴わずに現われている。前段落の説明がそのまま(26a)にも当てはまる。

- (27) a. *te+h-an-ana kiraro aho* (動作主態)
 DES+AV.FUT-VM-持つ 靴 私
 「私は靴が欲しい」
- b. *te+h-a-hazo kiraro aho* (動作主態)
 DES+AV.FUT-VM-得る 靴 私
 「私は靴が欲しい」

願望は、(27a, b)のように、*te*¹⁴プラス動作主態動詞の未来形で表現される。対応する被動者態の形式は無い。

- (28) a. *m-ila vola izy izao* (動作主態)
 AV.PRES-要る 金 彼 今
 「今、彼にはお金が要る」
- b. *ila-i=ny izao ilay vola* (被動者態)
 要る-PV=3sGEN 今 かの 金
 「そのお金は今、彼にとって必要だ」

「必要だ」に関しては、動作主態(28a)と被動者態(28b)の両方が得られた。

- (29) a. *tezitra t-amin=ny zandri=ko*
 怒っている PST-OBL=DEF 年下きょうだい=1sGEN
n-an-dainga i neny/ny reni=ko (語根動作主態)
 AV.PST-VM-嘘付く DEF ママ/DEF 母=1sGEN

¹³ (8b)同様、*iny* のような指示代名詞が名詞句とともに用いられるときには、名詞句の前後を囲むように指示代名詞が2つ配置される。

¹⁴ この *te* は、(24-26)にある *tia* から文法化を経てできたものである(森山 2003)。

「彼(女)は犬を恐れている」

b. a-tahor-a=ny ilay alika (被動者態)
 PV-恐れる-PV=3sGEN かの 犬

「その犬は彼(女)が恐れている」

「怖い・恐れている」に関しては、動作主態(30a)と、被動者態(30b)の両方が得られた。

2.7. 関係

角田(1991 [2009]: 101)の「6 関係」から見ていく。

- (31) a. m-an-ahaka ny rai=ny izy (動作主態)
 AV.PRES-VM-似ている DEF 父=3sGEN 彼(女)
 「彼(女)は自分の父親に似ている」
- b. tahaf-i=ny ny rai=ny (被動者態)
 似ている-PV=3sGEN DEF 父=3sGEN
 「父には彼(女)が似ている」
- c. m-i-tovy amin=ny rai=ny izy
 AV.PRES-VM-同じだ OBL=DEF 父=3sGEN 彼(女)
 「彼(女)は父と同じだ」

「似ている」に関しては、動作主態(31a)と、被動者態(31b)の両方が得られた。(31c)はそれらの類義文である。

- (32) a. m-isy sira ny ranomasina
 AV.PRES-VM-ある 塩 DEF 海
 「海は塩を含んでいる (海には塩がある)」
- b. m-isy sira anaty ranomasina
 AV.PRES-VM-ある 塩 中に 海
 「海は塩を含んでいる (海の中には塩がある)」
- c. m-a-sira ny ranomasina
 AV.PRES-VM-塩(つばい) DEF 海
 「海はしょっぱい」

「含んでいる」は、存在動詞で表わすが(32a, b), 意味を汲んで、「しょっぱい」と表現することも可能である(32c). この *masira* (しょっぱい) は, *sira* (塩) に動詞化あるいは形容詞化する接頭辞群 *m-a-* が付いたものであるが, インドネシア語で, *meng-N* で, 「Nを

持つ」という意味にできる程の生産性は無い。

- (33) a. dokotera ny zandri=ko
 医者 DEF 年下きょうだい=1sGEN
 「私の弟は医者だ」
- b. lasa/n-an-jary dokotera ny zandri=ko
 なる/AV.PST-VM-なる 医者 DEF 年下きょうだい=1sGEN
 「私の弟は医者になった」 (語根被動者態/動作主態)

「医者だ」はコピュラ無しの名詞述語文で表わされる(33a)。「なる」は語根被動者態動詞 *lasa* か、動作主態動詞 *nanjary* で表わされる(33b)。

2.8. 能力

角田(1991 [2009]: 101)の「7 能力」から見ていく。

- (34) a. m-a-hay m-i-tondra fiarakodia/aotomobilina izy
 AV.PRES-VM-できる AV.PRES-VM-運ぶ 車/車 彼(女)
 「彼(女)は車を運転することができる」 (動作主態)
- b. hai=ny ny m-itondra fiarakodia/aotomobilina
 できる(PV)=3sGEN DEF AV.PRES-VM-運ぶ 車/車
 「車の運転は彼(女)にできる」 (語根被動者態)

「できる」に関しては、動作主態(34a)と、語根被動者態(34b)の両方が得られた。*mahay/hai* のペアは「2.5. 知識」のところで、「～語ができる」(21)に関して、名詞被動者を探っているのを見た。(34b)では、動詞句 *mitondra fiarakodia/aotomobilina* (車を運転する)が文の述語 *hainy* (彼にできる)の主語になっていて、定冠詞を採っていることに注意されたい。

- (35) a. m-a-hay m-i-lomano¹⁷ (動作主態)
 AV.PRES-VM-できる AV.PRES-VM-泳ぐ
 「彼(女)は泳げる」
- b. hai=ny ny m-i-lomano
 できる(PV)=3sGEN DEF AV.PRES-VM-泳ぐ
 「泳ぎは彼(女)にできる」 (語根被動者態)

¹⁷ *milomano* は歴史的な動作主態接中辞 *-om-* を持っている。しかし、現在ではさらに、*m-i-* という動作主態接頭辞群を付けており、そちらが動作者態標識の機能を担っている。

の代わりに、「ここ」、「そこ」、「あそこ」等を意味する13個の指示詞のうちの1つを選び、その後場所名詞(句)を後続させて表わす。*Madagasikara* (マダガスカル)などの地名はそのままで場所名詞(句)であるが、*sekoly* (学校)は場所名詞(句)ではないので、接頭辞 *an-*を付けて場所名詞(句)*an-tsekoly*にする。接頭辞 *an-*の代わりに *amin'ny* (OBL=DEF)を要求する名詞(句)もある。*any* と *tany* の違いは、*any* が過去から現在までずっと「いる」ことを含意するのに対し、*tany* は、過去にはいたが今はもういないことを意味する(cf. 森山 2003)。*tonga* は語根で現われる1項動詞であり、過去も現在も無標形で表わす。

- (39) a. n-an-apa+dalana izy (動作主態)
 AV.PST-VM-切る+道 彼(女)
 「彼(女)は道を横切った」
- b. n-an-apaka irỳ lalana irỳ¹⁸ izy
 AV.PST-VM-切る その 道 その 彼(女)
 「彼(女)はその道を横切った」 (動作主態)
- c. n-iamp-ita irỳ lalana irỳ izy
 AV.PST-VM-渡る その 道 その 彼(女)
 「彼(女)はその道を渡った」 (動作主態)
- d. n-iamp-ita-a=ny¹⁹ irỳ lalana irỳ
 PST-VM-渡る-CV=3sGEN その 道 その
 「その道は彼(女)が渡った」 (状況態)

「道を横切った」は、疑似名詞抱合的な(39a)で表わすことができる一方、独立した名詞句 *irỳ lalana irỳ* (その道) を使って表現することもできる(39b)。(39a, b)の *nanapa(ka)* の原義は「(モノを)切った」で、これらの例(39a, b)では意味を拡張して使われている。その被動者態の形 *notapahi(na)* では、「切った」の意味が強くて、最早「横切った」の意味には使えないというのが、調査協力者の見解である。もう1つ、*niampita* 「渡った」で言うこともできる(39c)。(39d)は、「その道」を主語にした状況態の形である。(39c)で、*irỳ lalana irỳ* (その道) は前置詞等を伴っていないので、格標示的に無標にするために動詞を状況態にする必要は無いが、しかし「道」は場所であるので、それを主語にするためには、動詞を状況態にする必要がある(39d)。

¹⁸ (8b, 26)と同様に、*irỳ* のような指示代名詞が名詞句とともに用いられるときには、名詞句の前後を囲むように指示代名詞が2つ配置される。

¹⁹ 正書法では、*niampitàny* と書かれ、形態分析通りに **niampitaany* と書かれることはない。アクサン・グループはストレスアクセントが置かれることを示している。

- (40) a. n-an-dalo irỳ lalana irỳ izy (動作主態)
 AV.PST-VM-通る その 道 その 彼(女)
 「彼(女)はその道を通った」
- b. n-an-dalov-a=ny irỳ lalana irỳ (状況態)
 PST-VM-通る-CV=3sGEN その 道 その
 「その道は彼(女)が通った」

(39c, d)と同様に, (40a)で, *irỳ lalana irỳ* (その道) は前置詞等を伴っていないので, 格標示的に無標にするために動詞を状況態にする必要は無いが, しかし「道」は場所であるので, それを主語にするためには, 動詞を状況態にする必要がある(40b).

2.10. 感覚

感覚表現を見て行く.

- (41) a. noana izy
 空腹だ 彼(女)
 「彼(女)は空腹だ」
- b. m-an-getaheta izy
 AV.PRES-VM-喉が渴いている 彼(女)
 「彼(女)は喉が渴いている」

「空腹だ」, 「喉が渴いている」は(41a, b)の様に表現する. (41a)の述語は語根のみからなるものであり, (41b)の述語は, 動作主態述語の接頭辞群 *m-an-*を持っている.

- (42) a. m-an-gatsiaka aho
 AV.PRES-VM-寒い 私
 「私は寒い」
- b. m-an-gatsiaka androany
 AV.PRES-VM-寒い 今日
 「今日は寒い」

「寒い」(42)の述語は, 動作主態述語の接頭辞群 *m-an-*を持っている.

2.11. 相互

相互表現を見て行く.

3. 結論

2.1.節から2.8.節までを見ると、角田(1991 [2009])の二項述語階層による述語の分類が、マダガスカル語でも意味を持っていることが見て取れた。2.1.節「直接影響・変化」では、動作主態、被動者態、voa 被動者態の3つの形がいくつかの述語意味領域で得られ、特に例(1, 4)「殺す」では、動作主態が[+control, +volitional, +telic], 被動者態が[+control, +volitional, -telic], voa 被動者態が[-control, -volitional, +telic]として使い分けられていることが伺えた。2.2.節「直接影響・無変化」でも、動作主態、被動者態、voa 被動者態の3つの形がいくつかの述語意味領域で得られ、被動者態 [+control, +volitional]と voa 被動者態[-control, -volitional]の対立が見て取れた。2.3.「知覚」では、「見る」ことの [±control, ±volitional] は、2.1.節「直接影響・変化」、2.2.節「直接影響・無変化」とは違って、語彙的に違う動詞語根の選択で区別され、それぞれの動詞語根は、動作主態と被動者態の両方で使われることが見て取れた。「きく」ことに関しては、(11, 12) *nahare/nandre* 「聞こえる」は動作主態のみで用いられ、(13) *mihaino/henoi(=ny)* 「聴く」では、動作主態、被動者態の両方が使われることが見て取れた。また「見える/た」に関しては、(8b, 10b) *hita* という形で、被動者態の形態論を持たない語根被動者態の形式が使われることが見て取れた。2.4.節「追求」に関しては、動作主態と被動者態の両方が使われることが見て取れた。2.5.節「知識」についても全般的に動作主態と被動者態の両方が使われているが、被動者態は全般的に、被動者態の形態論を持たない語根被動者態の形式が使われることが見て取れた。2.6.節「感情」は少々複雑で、「好き」に関して、基本は語根被動者態 *tia* (25b)であるが、語根動作主態 *tia* (25a)も見られ、被動者態形態論をもった被動者態 *notiavi(na)* (24b)も見られた。「必要だ」(28)は動作主態と被動者態の両方が使われることが見て取れた。「怒っている」(29)に関しては、語根動作主態と、形態論を持った被動者態が見られた。「恐れている」に関しては両方とも形態論を持った動作主態と被動者態が得られた。2.7.節「関係」に関しては、「似ている」(31)は動作主態と被動者態の両方が見られた。「含んでいる」(32)は存在動詞 *misy* を用いて表現される。「同定」(33a)はコピュラ相当語句を使わずに、名詞述語を用いて表わされる。「同定」の inchoative には、動詞述語が用いられる(33b)。2.8.節「能力」に関しては、動作主態と被動者態の両方が見られた。

角田(1991 [2009])から離れて、2.9.節「移動」は、様々な現われ方をしている。(38) *tonga* 「来る」は語根1項動詞であり、動作主態と被動者態のどちらと同定したらいいのかはわからない。その他、動作主態の例(39a, b, c, 40a)と状況態の例(39d, 40b)が見られた。2.10.「感覚」では、動作主態と、被動者態の対立は無いが、語根述語(41a)と、動作主態の形態論を持った述語(41b, 42)が見られた。2.11.「相互」では、全般的に動作主態と、被動者態が見られた。しかし、「会った」(48)に関しては動作主態のみで、また第2項が斜格を採るもの(48a, c)が見られた。「一緒に踊る」(49)という連動詞表現でも、第2項は斜格を採っていた。

以上のように、マダガスカル語では、全般的に動作主態と被動者態の両方が使われるが、更に voa 被動者態が用いられる意味領域や、語根被動作者態が用いられがちな意味領域や、語根動作主態が用いられる意味領域などが見てとれた。また、第2項が対格ではなく、斜格になる例も見られた。角田の二項述語階層に関して大まかに言えることは、動作主態、被動者態、voa 被動者態の3つが揃うのは、他動性の高い「直接影響(2.1.節, 2.2.節)」であり、他方、語根被動者態が見られるのは、「知覚(2.3.節)²²」、「知識(2.5.節)」、「感情(2.6.節)」、「能力(2.8.節)」であり、voa 被動者態を持つ階層と、語根被動者態を持つ階層とは重なっていないことがわかる。語根被動者態がある場合は、絶対格・能格型的な語根被動者態が基本形となり、主格・対格型的な動作主態の方が派生形であることになる。このような語根被動者態が他動性の低い方の階層に広く散らばっていることはとても興味深い。

略号

- (接辞境界), = (倚語境界), + (語境界), ACC (accusative 対格), ARL (areal noun 場所名詞), AV (actor voice 動作主態), CAUS (causative 使役), CV (circumstantial voice 状況態), DEF (definite 定), DES (desiderative 願望), EXCL (exclusive 除外), FUT (future tense 未来時制), GEN (genitive 属格), LNK (linker リンカー), NEG (negative 否定), OBL (oblique 斜格), p (plural 複数), PQ (polar question 極性疑問), PRES (present tense 現在時制), PST (past tense 過去時制), PV (patient voice 被動者態), REC (reciprocal 相互), RED (reduplication 重複), s (singular 単数), VM (valency marker 結合価標識), VOA (voa-patient voice 被動者態)

参考文献

欧文

- Adelaar, Sander (2011). “Bantu-Austronesian contact phenomena in coastal East Africa (アフリカ東海岸におけるバントゥー語・オーストロネシア語の接触諸現象)”. 語学研究所 2011年度第4回定例研究会 (11月30日). 東京外国語大学語学研究所.
- Andro Vaovao sy Trano Printy Loterana. 1973. *Diksonera Malagasy – Anglisy (Malagasy-English Dictionary)*. Antananarivo: Trano Printy Loterana.
- Foley, William. 1985 (2007). “A typology of information packaging in the clause”. Timothy Shopen (ed.). *Language Typology and Syntactic Description, Volume I: Clause Structure, Second Edition*. Cambridge University Press. Pp. 362-446.
- Fugier, Huguette. 1999. *Syntaxe Malgache*. Louvain-la-Neuve: Peeters.

²² 角田(1991 [2009]: 101)の表では、2Aに当たる。2Bは含まない。

- Keenan, Edward. 1976. "Remarkable Subjects in Malagasy". Charles Li (ed.). *Subject and Topic*. New York: Academic Press. Pp. 247-301.
- Minoura, Nobukatsu. 2003. "Event Integration Patterns in Malagasy". 東京外国語大学論集第 86 号. Pp. 63-86.
- Rajaona, Siméon. 2006. "Particularités de la langue malgache". *Madagascar Fenêtres, Aperçus sur la Culture Malgache*. Antananarivo: Cité. Pp. 176-186.
- Rajemisa-Raolison, R. 1971. *Grammaire Malgache*. Fianarantsoa: Ambozontany.

和文

- 高垣敏博. 2013. 「語研論集特集「他動性」へのご協力とお願い」(メール添付書類)
- 角田太作. 1991 (2009). 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語—改訂版』. 東京: くろしお出版
- 箕浦信勝. 2004. 「動詞における付加語句的要素の標示について—いわゆる applicative について—」『東京外国語大学論集第 67 号』. 東京外国語大学. Pp. 39-60.
- 森山工. 2003. 『マダガスカル語夏期言語研修テキスト 文法編』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所